

参加した コース	社会課題探究コース			訪問国	オーストラリア
学校名	静岡県立ふじのくに 国際高校	氏名	須藤 馨	学年	3年

はじめに

私が里親制度に関心を持つようになったのは、小学校時代の友人が里子として里親家庭に引き取られ、突然離れ離れになった経験がきっかけである。「なぜ家族が別々に暮らさなければならないのか」という疑問から、自分なりに里親制度や特別養子縁組について調べ始めた。中学3年生では児童養護施設の職員から話を聞く機会があり、日本の里親制度の現状や課題、そして海外との違いを知った。里親制度は、さまざまな事情で実親と暮らせない子どもを家庭で養育する制度であるが、日本では多くの子どもが施設で生活しているのが現状である。本探究では、日本の里親制度の課題を明らかにし、よりよい制度のあり方について考えていく。

日本の里親制度の問題点

日本の里親制度には、以下のような課題が挙げられる。

- ・登録里親の数が少なく、受け入れ家庭が不足している。
- ・児童養護施設の負担が大きく、職員の業務が過重になっている。
- ・制度自体の社会的認知度が低く、理解が十分に広がっていない。
- ・生活保護を受けている家庭が里親になる場合、経済的支援との両立が難しい。
- ・里親家庭ごとの生活環境に差があり、支援の質にばらつきがある。
- ・社会全体に里親制度への偏見が残っており、制度利用への心理的な壁がある。

これらの課題を踏まえ、私は留学前に実際に現場や関係者から話を聞き、課題の背景を探った。

事前調査

留学前には、元衆議院議員の高橋みほ氏にお話を伺い、制度を政治的な観点から考察する機会を得た。また、児童養護施設の職員、幼児教育の専門家にも取材し、現場の課題や支援体制の実情について学んだ。こうした実地調査を通して、書籍やインターネットだけでは得られない生の声を聞くことができた。この段階で、里親制度に関わる課題は単に制度の仕組みだけでなく、「社会全体の意識」や「支援ネットワークの弱さ」にも関係していることを強く感じた。

オーストラリアでの探究

現地ではまず、ブリスベン市立図書館でオーストラリアの里親制度の歴史的背景を学び、制度の成り立ちと社会的背景を整理した。その後、民間の里親支援機関を訪問し、担当者から制度運営の仕組みや支援体制、里親と行政・民間との連携の実際について詳しく話を伺った。さらに、ケアーズでは里親家庭に委託された子どもたちの心理的ケアを専門に行うカウンセラーと面会し、子どもの心のケアを重視するオーストラリアの取り組みを学んだ。

また、地域の保育士養成機関や幼稚園を訪れ、子どもを育てる文化的価値観や保育方針の違いを日本と比較した。おもちゃ貸し出しボランティアや日本人会のアンバサダー活動にも参加し、現地の人々との交流を深めることで、多様な人々が子育てを支える文化を実感した。

さらに、留学先の街頭でインタビュー調査を行い、年齢や性別を問わず合計 60 人に里親制度の認知度を尋ねた。その結果、60 人全員が制度の存在を知っており、そのうち 32 人が制度の仕組みを具体的に説明できた。この結果から、オーストラリアでは制度が社会に根付き、市民の理解と関心が非常に高いことを確認した。

特に印象的だったのは、来場者約 2 万人規模のブリスベンフェスティバルで、日本とオーストラリアの里親制度の違いについて英語でスピーチを行った経験である。多くの人々が足を止め、真剣に耳を傾けてくれたことから、社会的関心の高さと、個人の声が社会を動かす力を強く実感した。



おもちゃ貸し出し
ボランティアの様子



スピーチの様子

エヴァンジェリスト活動

私はオーストラリアでの学びを通して日本の里親制度の改善に向け、民間機関の確立と役割の拡大、ブルーカード制度の導入、広報・啓発活動の充実の三点が重要であると考えられるようになった。そこで広報・啓発活動の一環としてトビタテ留学 JAPAN10 期生による講演会を開催し、50 名の留学関係者や今後トビタテに挑戦したい児童、生徒に向けて、自身の探究課題である里親制度の普及を目的として講演を行った。

まとめ

今回のトビタテ留学を通じた探究活動は、私にとって日本では得られない特別な経験の連続だった。留学中は、すべての判断を自分で行う必要があり、成功も失敗も自分の責任だった。その環境の中で、私はこれまで以上に決断力・勇気・問題解決力を身につけることができた。

また、初対面の人とも臆せず話せるようになり、新しいコミュニティに飛び込むことへの恐怖心がなくなった。英語で社会的なテーマを伝えるという挑戦は、自分の想いを言葉で表現することの大切さを教えてくれた。人と関わることの面白さや、考え方の違いを尊重する姿勢の大切さも学んだ。

さらに、失敗を重ねる中で「大抵のことはなんとかなる」という柔軟な考え方を身につけることができた。うまくいかないときも焦らず、原点に立ち返ってまた前に進めばよいという教訓は、今後の人生にも生かせる大切な学びである。

現地での出会い、ケアンズ日本人会やボランティア団体の人々との協働、街頭アンケート活動などを通して、多様な視点に触れることができたことも大きな財産となった。これからも、探究を通して得た気づきを社会に還元し、「子どもが幸せに生きられる社会」の実現に向けて行動し続けたい。